

豊山学報・第66号  
弘法大師御生誕千二百五十年  
記念特別号 抜刷  
令和5年3月発行  
真言宗豊山派総合研究院

# 『分別聖位經』について(1)

— 經題と本經の基本構造 —

木村秀明

# 『分別聖位經』について(1)

## —経題と本経の基本構造—

木村秀明

### はじめに

『分別聖位經』は、弘法大師空海によって『弁顕密二教論』<sup>1</sup>を始めとする主要著作に引用され、弘法大師教学の骨格を構成する重要な經典である。しかし、空海の引用は本経からではなく、本経に先行して説かれる「序」の部分である。この「序」を正確に理解するためには、本経の基本的構造と内容の把握が必要不可欠なはずである。しかし、『分別聖位經』の本経は極めて難解であり、空海の引用が「序」に限られているためか、本経全体についての体系立てた研究は今までほとんどなされていなかった。

『分別聖位經』は不空訳とされているが、梵本もチベット語訳も発見されていない。また本経に「梵本入楞伽偈頌品に云く」<sup>2</sup>として『入楞伽經』が引用されている。経題についても、請来經典目録等や『大正藏經』の間において相違が存在するなど、不思議な文献である。空海も「序」の全文をそのまま『分別聖位經』であるとして引用し、『御請来目録』にも自ら請来した經典として掲載しているが、何故か真言宗学徒が学ぶべき經典論書を規定した『真言宗所學經律論目録(三学録)』<sup>3</sup>にはその名が見あたらない。空海が請来した經論の原本を集めた『三十帖策子』にも収録されていない。

本稿では、『分別聖位經』の基本的情報である経題について整理した後、本経の基本的構造の全体像を提示したい。

## 『分別聖位經』の経題について

空海は『弁顕密二教論』に「金剛頂分別聖位經に云く」<sup>4</sup>等として『分別聖位經』の「序」を引用し、『御請来目錄』には、

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 一十三紙<sup>5</sup>  
とする。一方『大正藏經』<sup>6</sup>は、

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門 (一卷) 不空訳  
とし、両者の経題において「略述」「三十七尊」「修證」の単語の出入りがみられる。なお『大正藏經』は底本を高麗版とし、明版と黄檗版と縮刷大藏經を対校している。つまり宋版と元版は伝わっていない。

この経題の相違について安然(841～889～)は『八家秘録』において、上記の二つの経題を挙げて註を附し、註の最後に「私に云く是れ前の本なり」<sup>7</sup>と記し、両者は同一經典であるとの判断を示している。

『三十帖策子』に収録されていないため原文を直接確認できないものの、空海の引用した『分別聖位經』の「序」と『大正藏經』所収の「序」が一致するため、空海が請来した「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門」は、「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門」の経題をもつ『大正藏經』の『分別聖位經』をさすと思われる。

この他にも中国の訳経目録や日本への請来目録等において、『分別聖位經』の経題には揺らぎがみられる。これらには、『分別聖位經』の成立や、当経がどのような性格の經典と捉えられていたか等の事情が多少反映されている可能性があるとも思われる。よって、以下に安然に至るまでの経題の変遷を整理することにする。

## 訳経目録類における『分別聖位經』

『表制集』不空目録における『分別聖位經』

『分別聖位經』の名が最初に確認される文献は、『不空表制集』<sup>8</sup>である。『不空表制集』の第三巻に収録されているAD.771の自選目録において、不空訳の經典と

して71 経典<sup>9</sup>が列挙されるなかで、次の様に前後を『十八会指帰』と『一字頂輪王経』に挟まれて、17 番目に『分別聖位経』が登場する。

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷

菩提場所説一字頂輪王經五卷

(Vol.52, 839b14-b16)

この『表制集』不空目録の「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門」とする経題が、空海の『御請来目録』に継がっている。

『開元録』付録における『分別聖位経』

次に『分別聖位経』と思われる別系統の経典名が、『開元録』<sup>10</sup>の末尾に付加された付録の中に見出される。この付録は、正覚寺に収蔵されていた不空の新訳経典の現蔵目録であり、AD.784 に作られた<sup>11</sup>。そこには74 の経典名が、巻数と紙数と共に、8 帙に分かれて列記されている。その54 番目、第7 帙<sup>12</sup>の10 番目に、以下の様に『分別聖位経』と思われる経典名が記載されている。

瑜伽蓮華部念誦儀一卷七紙

略述金剛頂瑜伽修證法門儀一卷十三紙

金剛頂降三世大儀一卷四紙

(Vol.55, 700b20-23)

これを不空目録および『大正蔵経』の経題と比べると、「分別聖位」の語が省略され、末尾に「儀」が加えられている。なお「略述」と「修證」が付加され、「三十七尊」が省略されている点では、『大正蔵経』の経題により近い。

この『開元録』付録の74 経典と前述の『表制集』不空目録の71 経典を比較すると、ほとんどの経典名が類似してはいるが、完全に一致するものは11 経典のみであり、かなりの相違がみられる。しかし、次に述べる『続開元録』等には、『表制集』不空目録が継承されており、さらに各経典の紙数や内題等の情報が付記されている。その情報を照らし合わせると、この『開元録』付録の74 経典中の65 経典を『表制集』不空目録の65 経典と同定することができる。論文末の「不空目録 - 『開元録』付録 経典同定表」に対応関係を示した。この「略述金剛頂瑜伽修證法門儀」も『表制集』不空目録の「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門」に同定される。なお、

『分別聖位經』について(I) (木村秀)

不空目録と『開元録』付録は、經典の本体に記された内題が長い場合には、それを短縮して外題として目録に掲載している。特に、内題が長い場合に、それを短縮する方法が異なることによって、両目録の外題に大きな違いが生じている。

『開元録』付録の経題に於ける「分別聖位」の欠落は、付録による内題の単なる省略と見なせる。「修證」の付加は、後に述べるように『聖位經』の「序」に、その原因を見出すことができる。末尾の「儀」の付加は、『開元録』付録が内題の「法門」や「儀軌」を単に「儀」とする傾向が強いため、付録による付加と思われる。一方、「略述」の付加と「三十七尊」の欠落は、『大正藏經』の経題と共通しており、両目録の内題に元もと相違があったと思われる。

このように『大正藏經』の「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門」系統に属する経題名の最古の事例を、この『開元録』の別録に確認することが出来る。

#### 『続開元録』における『分別聖位經』

上記の『開元録』の本体が作られてから64年後のAD.794に、その間に新たに訳された經典だけを集めた『続開元録』<sup>13</sup>三巻が円照(～785～804～)によって作られた。この内、上巻には不空訳の經典について「三朝所翻經。總七十七部。共一百一卷。并都目一卷」(Vol.55, 748c22-23)として71部の經典を挙げるが、經典名、並び順、巻数までほぼ完全に前述の『表制集』不空目録と一致する<sup>14</sup>。このように、『続開元録』は不空訳經典に関して『表制集』不空目録をそのまま掲載しているが、所蔵されていた經典を実際に調査してその情報を付記している。『分別聖位經』については次のように、

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷九紙

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷并序十三紙

菩提場所說一字頂輪王經五卷 七十八紙

(Vol.55, 749a12-15)

とし、やはり17番目に挙げている。ここでは、『分別聖位經』には「序」があり、紙数が13紙であることが明かされている。

さらに、現蔵目録を載せた下巻には、

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷經内略無十八會字九紙

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷并序經中云修證法門序十三紙

菩提場所説一字頂輪王經五卷 七十八紙

(Vol.55, 767a14-17)

とある。割注の「并に序。經中に云く修證法門序」から、『分別聖位經』の外題は「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門」であったが、「序」の頭には「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位修證法門序」と「修證」の語が加えられていたことが判明する。

なお、上記のように『続開元録』下巻には、『表制集』不空目録では不明であった紙数、所収の帙番号、内題等の情報が詳しく記載されており、前記のようにこの情報に基づいて『表制集』不空目録と『開元録』別録に収められている經典の同定が容易になる。また、『分別聖位經』は15番目の『吉祥天女十二名號經』から20番目の『金剛壽命陀羅尼經』と共に第3帙に収蔵されていたとされる<sup>15</sup>。

『貞元録』における『分別聖位經』

上記の『続開元録』と同じ円照によって、AD.800に編纂された『貞元録』<sup>16</sup> 30巻にも、『分別聖位經』が5回掲載されている<sup>17</sup>。総録<sup>18</sup>の中で円照が新たに集めた新訳經典だけを掲載した〈奉承御制〉では、不空訳經典を列挙する最初に『表制集』不空目録をそのまま掲載している。その中では次の様に、

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷

菩提場所説一字頂輪王經五卷

(Vol.55, 772b5-7)

として17番目に『分別聖位經』を載せている。

一方、同じ総録の、新訳も含めた総合目録である〈総集群經録〉でも、不空目録を用いて、

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷經内略無十八會字

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷并序經中云修證法門序

菩提場所説一字頂輪王經五卷

(Vol.55, 879b18-21)

とするが、上述の『続開元録』下巻で示された内題の情報が加えられている。ただし総録の性格上、紙数と帙番号は記載されていない。

別録部分には3回『分別聖位經』が掲載されるが、いずれも上の総録とは異なる

『分別聖位經』について(1) (木村秀)

る順で經典が掲載されている。最も多い情報が付記されている、最後の〈現定入蔵録〉では『千臂千鉢曼殊室利經』十卷の次に、

上一經十卷同帙

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷并序經 (云) 中修證法門序大興善寺三藏沙門大廣智不空

奉詔譯貞元新入目錄一十三紙

金剛頂瑜伽三十七尊禮一卷經内題云…… (Vol.55, 1034b2-7)

(中略)

上十三經十三卷同帙 (Vol.55, 1034c4-6)

とし、『分別聖位經』が『金剛頂瑜伽三十七尊禮』を始めとする13經典<sup>19</sup>と共に同一の帙に収められていたとする。この帙の収蔵情報は、同じ円照が著した『統開元録』下巻の現蔵録の帙の分類と相違する。なお、上述の『開元録』付録の正覺寺經蔵の帙分類とも相違している。

『貞元録』の別録部分の他の2例も、この現蔵録〈現定入蔵録〉の帙の収蔵情報に従った形で、『分別聖位經』を掲載している。

『一切經音義』における『分別聖位經』

訳経目録ではないが、上の『統開元録』や『貞元録』と近い年代の、唐建中年間(AD.780～783)末からAD.807に著された、諸經論の音写語や難解語を解説した『一切經音義』<sup>20</sup>に、以下の様に『分別聖位經』についての記載がある。

金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序

警覺上京影反孔注尚書云警戒也亦覺也古今正字從言敬聲

鎖械上蘇果反字書云連鍊也說文從金貨聲經作鎖俗字也下諧戒反廣雅云械桎也古今正字從木戒聲

能羸力迫反賈逵注國語云羸病也杜注左傳云弱也許叔重云劣也字書疲也說文痰也從羊羸聲

階級金立反顧野王云級階之等數也說文從糸及聲 (Vol.54, 584b19-22)

經題には「序」とあるが、その下で解説が加えられている「鎖械」「能羸」「階級」の3語は何れも『分別聖位經』の本経に出てくる用語である。「略述」の語がないものの、「三十七尊」を欠く『大正藏經』の「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門(序)」系の經題の存在を一応確認できるであろう。「略述」の有無に関しては、『分

別聖位經』あるいは『金剛頂經』が中国に於てどのように認識されていたかを探る手掛かりになると思われる。

## 請来目録における『分別聖位經』

### 空海の請来目録

以上のように中国に於て、『表制集』不空目録系の目録に掲載された1巻13紙の『分別聖位經』の経題は「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門」であったが「序」の内題には「修證」が入っていた。また同時に、同じ1巻13紙の『分別聖位經』でありながら『大正藏經』系の「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門(序)」に連なる「略述金剛頂瑜伽修證法門儀」・「金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序」の経題を持つ『分別聖位經』が混在していたと思われる。

このような状況のもと、空海は入唐して『分別聖位經』を日本へ請来したのであるが、AD.806の『御請来目録』には、

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷九紙

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷一十三紙

菩卷場所説一字頂輪王經五卷七十八紙

(『定本弘法大師全集』第1巻7頁。T.No.2161, Vol.55, 1061a21-24)

と、『表制集』不空目録系の経題と紙数を記載している。

### 円仁の請来目録

次に、空海の後に入唐した円仁(794～864)には、2本の請来目録がある。AD.840の、揚州を中心に聚集した典籍を掲載した最初の目録<sup>21</sup>には、『分別聖位經』が収録されていないが、帰朝したAD.847に上奏した『円仁録』<sup>22</sup>には次の様にある。

大虚空藏菩薩念誦法一卷不空

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序一卷不空

受菩提心戒儀一卷不空

般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧耶真實金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅義述

『分別聖位經』について(I) (木村秀)

一卷阿目佉金剛述

(T.No.2167, Vol.55, 1079c6-11)

ここに『大正藏經』に採用された完全な經題が初めて登場する。上記の『統開元錄』等の内題の情報を参照すると、円仁は長大な經題も正確を期して省略せず表記した傾向が強く見られる<sup>23</sup>。よって円仁が写經した『分別聖位經』には、「序」に「略述」が冠される一方「三十七尊」が欠けている『大正藏經』と同じ經題が記されていたと思われる。

### 円珍の請来目録

なお、円珍(814～891)も『分別聖位經』を請来している。円珍には請来目録が5本ある。入唐後に福州、温州、台州等において収集した典籍を掲載した最初の2本の目録<sup>24</sup>にはないものの、その後長安の青竜寺の法全(～841～847～)から与えられた典籍の目録であるとされる『青竜寺録』(成立AD.855)以降の3目録<sup>25</sup>に『分別聖位經』が記されている。

すなわち、『青竜寺録』では、

金剛頂瑜伽十八會指歸一卷

金剛頂分別聖位法門一卷

菩提場所説頂輪王經五卷

(T.No.2171, Vol.55, 1096a15-17)

として、不空目録にほぼ基づいて『分別聖位經』を掲載している<sup>26</sup>。經題に「三十七尊」が欠けているが、『青竜寺目録』では不空目録の經題と微妙に相違する事例が多く<sup>27</sup>、「三十七尊」も円珍による省略と思われる。

### 安然の判定

以上のように、『分別聖位經』について、日本には、『開元錄』不空目録系の「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門」(「序」には「修證」が加えられていた)と、円珍が請来した『大正藏經』系の「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序」との、2系統の經題が日本に伝えられていた。このような状況下、安然は『八家秘録』において、

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷并序經中云修證法門不空譯貞元新入目録海無注圓  
覺缺注

とし<sup>28</sup>、両者は同一經典であると判断を下したのである<sup>29</sup>。

## 『分別聖位經』本經の基本構造

### 段落設定

『分別聖位經』本經は、極めて難解である。特に仏身に関する教説の中に統一的な矛盾のない理論を探ることが困難である。本經は一応不空訳とされているが、先述のように本文中に「梵本入楞伽偈頌品に云く」として別の經典が引用されていることなどから、訳者によって挿入された部分の存在を仮定して、全体を俯瞰してその構造を探り、段落を以下の様に仮に設定した。

《序 段》	(T.No.870, Vol.18, 288b9)
〈阿迦尼吒天に於ける成道〉	(288b9)
〈須彌山頂への移動〉	(288b15)
《三十七尊出生段》	
〈挿入文① 自受用と他受用身〉	(288b19)
〈三十六尊の出生〉	
〈四仏の出生〉	(288b20)
〈四波羅蜜の出生〉	(288b24)
〈十六大菩薩の出生〉	(288c13)
〈内の四供養の出生〉	(290a2)
〈外の四供養の出生〉	(290b1)
〈四摂行の出生〉	(290b29)
〈後段との関係〉	(291a2)
《三十七尊の加持と得益段》	
〈挿入文② 毘盧遮那の自受用身と他受用身〉	(291a2)
〈挿入文③ なぜ三十七尊か〉	(291a6)

〈三十六尊の加持と得益〉

〈四仏の加持と得益〉 (291a12)

〈四波羅蜜の加持と得益〉 (291a17)

〈十六大菩薩の加持と得益〉 (291a23)

〈内の四供養の加持と得益〉 (291b19)

〈外の四供養の加持と得益〉 (291b24)

〈四摂行の加持と得益〉 (291b29)

〈当段の功能・目的〉 (291c7)

《率都婆段》 (291c8)

このように、『分別聖位經』本經は、《序段》とそれに続く《三十七尊出生段》・《三十七尊の加持と得益段》・《率都婆段》の3段より構成されており、《三十七尊出生段》の冒頭に〈挿入文①〉、《三十七尊の加持と得益段》の冒頭に〈挿入文②・③〉が挿入されている。〈挿入文①・②・③〉は、何れも仏身に関するものである。

## 各段落の概要

以下に、本經の概要を段落ごとに順を追って示す。

### 《序段》の概要

まず《序段》は、『初会金剛頂經』の最初の〔序文〕と〔正宗分〕の第一瑜伽三摩地（五相成身觀）まで<sup>30</sup>を略説したものである。特に五相成身觀の最後の宝灌頂と金剛界如来の会座が説かれる箇所<sup>31</sup>を、不空訳『初会金剛頂經』の訳語をそのまま使用しながら所々省略する形で短縮している。前述の『大正藏經』系の『分別聖位經』の経題の「略述」は、まさに《序段》を意識して付加されたと思われる。

形態上は『初会金剛頂經』をそのまま省略して短縮しているが、《序段》が描き出す情景は『初会金剛頂經』と大きく相違する。『初会金剛頂經』では、〔序文〕において毘盧遮那如来が色究竟天（阿迦尼吒天）に住していた状況が説かれた後、〔正宗分〕に至ると場面が閻浮提に突然変わり、五相成身觀による一切義成就菩薩（釈尊）の成道が説かれ、金剛界如来となった一切義成就菩薩が四仏に伴われて閻浮

提から須弥山頂の金剛摩尼峯樓閣へ移動する。その後、毘盧遮那如來と四仏が相互に諸菩薩を出生し、金剛界三十七尊が顯現することになる。一方《序段》では、『初会金剛頂經』の閻浮提における一切義成就菩薩の五相成身觀による成道をまったく無視して、五相成身觀の最後の部分を短縮して提示し、毘盧遮那如來が色究竟天において成道し、その後直ちに須弥山頂に移動し、五仏を中心とした諸尊の衆団が成立したとする。

すなわち、〈阿迦尼吒天に於ける成道〉では、

爾時金剛界毘盧遮那佛。在色界頂阿迦尼吒天宮。初受用身成等正覺。證得一切如來平等智。即入一切如來金剛平等智印三昧耶。即證一切如來法平等自性光明智藏。

成等正覺已。一切如來。從薩埵金剛。出虛空藏大摩尼寶。以灌其頂。令發生觀自在法王智。安立一切如來毘首羯磨善巧智

(Vol.18, 288b9-15)

【書き下し】

爾の時、金剛界毘盧遮那佛は色界頂の阿迦尼吒天宮に在して、初め受用身をもて等正覺を成じ、一切如來の平等智を證得した。即ち一切如來金剛平等智印三昧耶に入り、即ち一切如來法平等自性光明智藏を證した。

[毘盧遮那佛が] 等正覺を成し已ると、一切如來は薩埵金剛より虛空藏大摩尼寶を出し、以って其の[毘盧遮那佛の] 頂に灌ぎ、[盧遮那佛に] 觀自在法王の智を發生させ、[盧遮那佛を] 一切如來毘首羯磨の善巧智に安立せしめた。

とし、これに続けて〈須弥山頂への移動〉で、

令往詣須弥山頂金剛摩尼寶峯樓閣。集聖衆已。於是毘盧遮那佛。加持一切如來。施設四方坐師子座。時不動如來。寶生如來。觀自在王如來。不空成就如來。復加持毘盧遮那佛。

(Vol.18, 288b15-19)

【書き下し】

[一切如來は毘盧遮那佛を] 須弥山頂の金剛摩尼寶峯樓閣に往詣させ、聖衆を集めせしめ已ると、

是に於て毘盧遮那佛は一切如來(四仏)を加持し、四方を施設し師子座に坐した。時に不動如來と寶生如來と觀自在王如來と不空成就如來は、復た毘盧遮那佛

『分別聖位經』について(1) (木村秀)

を加持した。

とする。これは、『分別聖位經』が、『初会金剛頂經』に対して独自の解釈を施し、それを大胆に表明していると捉えることもできる。

この《序段》と『初会金剛頂經』の詳しい関係とその分析・評価は、稿を改めて論じたいが、《序段》は漢訳『初会金剛頂經』から直接造りだされたものではなく、サンスクリット原文の存在を一応想定できるようである<sup>32</sup>。

### 《三十七尊出生段》の概要

#### 〈挿入文①〉

《三十七尊出生段》では、毘盧遮那の自受用智からの金剛界 36 尊の出生が説かれるが、その直前に〈挿入文①〉「然受用身有二種。一自受用。二他受用。(然るに受用身に二種有り。一に自受用。二に他受用)」が置かれている。〈挿入文①〉に続く〈三十六尊の出生〉では、「自受用」の語が頻繁に出てくるが、すべて仏身ではなく智恵、すなわち自受用智を意味している。「他受用」も 1 回使われるが、自受用智を他に受用させるという文脈で使われている。自受用智を自ら證得する仏身は自受用身であり、自受用智を證得させられる他者を他受用身であると敢えて類推することも可能ではあるが、この場合他受用身は仏身ではなく所化の菩薩・行者となってしまう。また〈三十六尊の出生〉は仏身ではなく智恵を中心に展開しており、自受用身と他受用身の区別が明確に説かれている訳でもない。〈挿入文①〉に引きずられて自受用身・他受用身の概念を導入して〈三十六尊の出生〉を理解しようとする、思わぬ困難に巻き込まれてしまう。

#### 〈三十六尊の出生〉

自受用身・他受用身の束縛を離れて〈三十六尊の出生〉を見直すと、先ず〈四仏の出生〉において

毘盧遮那佛於內心。證得自受用四智。大圓鏡智。平等性智。妙觀察智。成所作智。

外令十地滿足菩薩他受用故。從四智中。流出四佛。各住本方坐本座。

(Vol.18, 288b19-23)

【書き下し】

毘盧遮那佛は、内心に於て、自受用の四智を證得す。大圓鏡智と平等性智と妙觀察智と成所作智 [の四智である]。

[毘盧遮那佛の] 外に十地満足の菩薩の他をして [四智を] 受用せしめんが故に、四智の中より四佛を流出した。[四仏は] 各おの本方に住し本座に坐した。としている。ここでは、毘盧遮那仏が自から証得した自受用の四智から、四仏が出生したとする。これは、自から証得した四智を、毘盧遮那仏が他者である十地を満了した菩薩にも得させる (受用させる) ためであるとする。このように「自受用」と「他受用」は智恵の受用 (=証得・獲得) に関して用いられている。「自」とは毘盧遮那仏であり、「他」とは毘盧遮那仏からみて「外」の他者であり、毘盧遮那仏が自から証得した智恵を受用させる対象、つまり所化の十地満足の菩薩である。毘盧遮那仏がこの菩薩に自己の智恵を受用させるために出生させた仏身(四仏)を「他」としているわけではない。このように、当所の「他受用」は、覺りの境地の恩恵を他に受用させる他受用身、即ち衆生に説法をし、衆生を救済する能化の仏身を想定した「他受用」ではないのである。なお、他者である所化の十地満足の菩薩については、下の 32 尊の出生における所化の菩薩とあわせて考察したい。

次に、〈四波羅蜜の出生〉から〈四摂行の出生〉までにおいても、毘盧遮那仏の自受用智からの金剛界三十二尊の出生が、同一形式の文の繰り返しによって、説かれている。すなわち、四波羅蜜の最初の金剛波羅蜜の出生について、

毘盧遮那佛於内心。證得**五峯金剛菩提心**三摩地智。自受用故。

從**五峯金剛菩提心**三摩地智中。流出金剛光明。遍照十方世界。淨一切衆生大菩提心。

還來收一體。爲令一切菩薩。受用三摩地智故。成**金剛波羅蜜**形。住**毘盧遮那如來前月輪**。

(Vol.18, 288b24-29)

【書き下し】

毘盧遮那佛は内心に於て、**五峯金剛菩提心**三摩地智を證得す。自受用の故なり。

[その] **五峯金剛菩提心**三摩地智の中より、**金剛光明**が流出し、十方世界を遍

照し、一切衆生の大菩提心を淨めた。

[金剛光明は] 還り來って一體に收まり、一切菩薩をして三摩地智を受用せしめんが爲の故に、金剛波羅蜜の形と成り、毘盧遮那如來の前の月輪に住した。とする。四波羅蜜の第二の金剛宝波羅蜜から四摂行菩薩の最後の金剛鈴菩薩にいたる 31 尊についても、太字部分を入れ替えただけの、同一の形式の文の繰り返しになっている。

すなわち、32 尊ごとに、毘盧遮那仏が自受用智である〇〇三摩地智を証得する。その〇〇三摩地智から△△という光明が流出し、十方世界を照らして利他行を中心とする様々な仏事を行う。その後、その〇〇三摩地智を一切の菩薩に受用させるため、つまり証得させるために、その光明が集まって各菩薩の身体が形成され、金剛界曼荼羅の各尊の所定の位置に着くとする。

このように、各尊に対応した〇〇三摩地智という毘盧遮那仏の個別の自受用智から 32 尊が出生し、それは個別の自受用智を一切の菩薩に得させるためであるとする。

この毘盧遮那仏の個別の自受用智を獲得する一切の菩薩とは、「一切」とはされているものの実際は無上乘の菩薩、即ち真言行者を意味すると思われる。上記の〈四仏の出生〉における四智を受用する十地満足の菩薩も、同様に真言行者を指し示めしていると思われる。ただし、十地を満了した無上乘の菩薩だけが四智を証得することができ、それ以前の真言行者は 32 尊に対応する個別の三摩地智までしか得られない、という区別を設けているか否かは即断できない。

いずれにしても〈三十六尊の出生〉には、真言行者に個別の自受用智を得させるために、毘盧遮那仏の個別の自受用智から 32 尊が出生する過程が説かれている。当所には、印も真言も説かれず、観想法としても極めて簡潔な説明が示されているだけではあるが、〈三十六尊の出生〉は、後期密教の有名な法身から曼荼羅の諸尊の出生を観想する生起次第に対応するように思われる。生起次第に連なる観想法の簡略な原初形態であると評価することも可能であろう。

〈後段との関係〉

以上のように上記の《三十七尊出生段》の〈三十六尊の出生〉を生起次第の原

初形態であると考え、次の段の《三十七尊の加持と得益段》は、諸尊を順次観想して法身にいたる究竟次第の原初形態を説く段であると捉えることができる。そのために〈後段との関係〉には「若依次第(明乙丙欠) 説前後有差。(若し次第に依って説かば、前後に差有り)」(Vol.18, 291a1) という短い文が説かれている。この一文は、前後両段の観想法の基本的性格を意識して、相違する観想法を敢えて提示する正統性を主張するために、当所に挟まれたと思われる。

### 《三十七尊の加持と得益段》の概要

当段では、上記のように究竟次第の原初形態に対応すると思われる観想法が説かれることになるが、その前に次の様な〈挿入文②・③〉が挿入されている。

まず〈挿入文②〉では、

據報身佛。頓證身口意三種淨業。遍周法界。於一一法門一一理趣一一毛孔身分相好盡虛空界。不相障礙。各居本位以成遍照光明毘盧遮那自受用身他受用身。  
(Vol.18, 291a2-6)

【書き下し】

報身佛に據れば、[三十七尊は]身口意の三種の淨業を頓證し、法界に遍周する。一一の法門と一一の理趣と一一の毛孔に於いて、身分が相好して、虚空界を盡し、相い障礙せず。[その後三十七尊は]各おの本位に居して、以って遍照光明[なる]毘盧遮那[仏の]自受用身[と]他受用身と成る。

とする。当所では、「受用身」ではなく敢えて「報身佛」を出して、最終的に金剛界三十七尊を報身毘盧遮那の自受用と他受用身に結びつけようとしている。

〈挿入文③〉では、

若依二乘。次第而説。若不具修三十七菩提分法 證得道果。無有是處。

若證自受用身佛。必須三十七摩地智 以成佛果。

梵本入楞伽偈頌品云。「自性及受用。變化并等流。佛徳三十六。皆同自性身。」

并法界身。總成三十七也。

(Vol.18, 291a6-11)

【書き下し】

若し二乘に依って次第して説かば、若し三十七菩提分法を具に修せず道果

『分別聖位經』について(1) (木村秀)

を證得すといわば、是の處<sup>ことわ</sup>り有ること無し。

若し〔無上乘に依って次第して説かば〕自受用身佛を證するには、必ず三十七摩地智<sup>もち</sup>を須いて、以って佛果を成ず。

梵本の入楞伽〔經〕の偈頌品に云く「自性及び受用と變化並びに等流の佛徳三十六は、皆な自性身に同じ」と。〔佛徳三十六に〕法界身を并せて、總じて三十七〔尊〕と成なる也。

とし、上の〈挿入文②〉で報身毘盧遮那の自受用身と他受用身であるとした金剛界諸尊が、なぜ三十七尊であるかを、小乗、密教、大乘仏教の教理・經典によって説明している。このうち、密教教理に依る説明だけは、次に説かれる〈三十六尊の加持・得益〉に基づいてはいるが、強引に仏身について説く〈挿入文②・③〉は、どう見ても前後との合理的な関係性を欠いている。

〈挿入文①・②・③〉における仏身観については、「序」の仏身観とともに稿を改めて論じたい。

#### 〈三十六尊の加持と得益〉

上記の〈挿入文②・③〉との関連を一旦無視して、〈三十六尊の加持と得益〉を見直すと、まず〈四仏の加持と得益〉で、

最初於無上乘。發菩提心。由阿閼佛加持故。證得圓滿菩提心。

由(乙丙寶生佛加持故 内)證菩提。外感空中寶生佛灌頂。受三界法王位。

由觀自在王佛加持故。語輪能說無量修多羅法門。

由不空成就佛加持(乙丙故)。於諸佛事及有情事。所行利樂皆悉成就。

(Vol.18, 291a12-17)

#### 【書き下し】

〔行者は〕最初に無上乘に於て菩提心を發すべし。阿閼佛の加持に由るが故に、  
〔行者は〕圓滿菩提心を證得する。

〔寶生佛の加持に〕由るが〔故に〕、〔行者は〕〔内に〕菩提を證し、外に空中に寶生佛の灌頂を感じて三界法王の位を受ける。

觀自在王佛の加持に由るが故に、〔行者は〕語輪をもって能く無量の修多羅の法門を説く。

不空成就佛の加持に由るが〔故に〕、諸の佛事及び有情事に於て〔行者が〕行ずる所の利樂は皆な悉く成就する。

とする。当所に続く〈四波羅蜜の加持と得益〉から〈四摂行の加持と得益〉においても、由金剛波羅蜜加持故。證得圓滿周法界遍虛空大圓鏡智。  
由寶波羅蜜加持故。於無邊衆生世間及無邊器世間。證得平等性智。

(中略)

由金剛鎖菩薩加持故。得佛堅固無染觀察大悲解脫。

由金剛鈴菩薩加持故。得如來般若波羅蜜音聲。聞者能摧藏識中諸惡種子。

(Vol.18, 291a17-c6)

【書き下し】

金剛波羅蜜〔菩薩〕の加持に由るが故に、〔行者は〕圓滿・周法界にして遍虛空の大圓鏡智を證得する。

寶波羅蜜〔菩薩〕の加持に由るが故に、〔行者は〕無邊の衆生世間及び無邊の器世間に於て、平等性智を證得する。

(中略)

金剛鎖菩薩の加持に由るが故に、〔行者は〕佛の堅固にして無染なる觀察と大悲の解脫を得る。

金剛鈴菩薩の加持に由るが故に、〔行者は〕如來の般若波羅蜜の音聲を得て、〔その音声を〕聞く者は藏識の中の諸の惡の種子を能く摧く。

として、各尊格の加持によって、〔密教行者が〕種々の功德・能力を獲得するとする。さらに、最後に〈当該の功能・目的〉で、

以此三十七内證無上金剛界分智威力加持。頓證毘盧遮那之身。(Vol.18, 291c7-8)

【書き下し】

此の三十七の内證の無上なる金剛界の分智の威力〔による〕加持を以て、〔行者は〕毘盧遮那の身を頓證する。

と締めくくっている。上述の《三十七尊出生段》では、金剛界 36 尊は毘盧遮那仏の個別の自受用智から出生したとされていた。当所では、この個別の自受用智を「分智」と言い直している。そこで「三十七の内證の無上なる金剛界の分智の威力

加持を以て」とは、金剛界三十七尊<sup>33</sup>の加持によって、ということになる。つまり、当所の《三十七尊の加持と得益段》の最後に、金剛界三十七尊の加持によって、行者は「毘盧遮那の身を頓證する」と明示されるのである。

すなわち、《三十七尊出生段》では毘盧遮那仏からの金剛界 36 尊の出生を觀想し、《三十七尊の加持と得益段》ではその各尊格の加持により種々の能力を獲得する過程を觀想し、最終的に行者は毘盧遮那仏の身体を獲得するのである。ここに《三十七尊出生段》と《三十七尊の加持と得益段》が、後期密教の生起次第と究竟次第に類似する、関連性の高い一連の觀想法を説いていることを見取することができる。

兩段の觀想法に説かれる光明の働きや加持の功能等の内容も、かなりよく関連性が保たれているが、相関性に破綻が見られる場合もある。特に四波羅蜜において顕著であるが、詳しくは別稿で論じたい。

### 《率都婆段》の概要

当段は、他の3段に比べると、短く、そして極めて難解である。すなわち、まず、  
從無見頂相。流出無量佛頂法身。雲集空中。以成法會。光明遍覆如塔相輪。  
十地満足莫能觀見。  
冥加有情。身心罪障悉令殄滅。無能知者。雖不能覺知。能息諸苦而生善趣。

(Vol.18, 291c8-12)

#### 【書き下し】

[毘盧遮那如来の] 無見頂相より無量の佛頂法身を流出し、[流出した無量の佛頂法身が] 空中に雲集して、以って法會と成る。光明が[法會を] 遍く覆うこと塔の相輪の如し。十地満足 [の菩薩] も能く [このことを] 觀見すること莫し。

[光明が] 有情を冥加して、身心の罪障を悉く殄滅せしめれども、[このことを] 能く知る者無し。[有情は] 覺知すること能わずと雖も、能く諸苦を息めて而も善趣に生ず。

とする。ここでは、唐突に無量の「佛頂法身」の流出が説かれ、この仏頂法身が集まって空中で「法會」を形成する。この法會は、顕然態の金剛界曼荼羅ではなく、

無数の仏頂法身の集合体と思われる。その集会は「塔の相輪」のような光明によって覆われているとされるが、塔の相輪とは何かはつきりしない<sup>34</sup>。ともかく、この塔の相輪の様な光明に覆われた法会は、十地を満足した菩薩すらも見る事ができないとする。また、この光明は有情の罪を除くが、有情はこの事に気付かないが、苦悩が消えて善処に生まれ変わる、とする。さらに続けて、

從光明流出十六菩薩及八方等内外大護。展轉出光。照觸惡趣。

以成窺波階級。衛護諸佛窺波法界宮殿。成爲相輪。令(明乙丙全)身。現證金剛界如來毘盧遮那遍照之身也。(Vol.18, 291c12-16)

【書き下し】

光明より十六〔大〕菩薩及び八方等の内外の大護(金剛界32尊)が流出し、〔この三十二尊は〕展轉して光を出して〔この光明が〕惡趣を照觸する。

〔これらの三十二尊は〕窺波(stūpa)の階級と成るを以って、諸佛(五仏)の窺波と法界宮殿を衛護し、〔これが〕相輪と爲るを成し、〔行者の〕身をして金剛界如來毘盧遮那遍照の身を現證せしむる也。

とする。すなわち、上記の法会を覆う光明から、金剛界32尊が流出するとする。前述の《三十七尊出生段》では毘盧遮那の自受用智からの四仏を含む金剛界36尊の出生過程が説かれていたので、当所では《三十七尊出生段》とは別の諸尊生起の過程が説かれていることになる。

次に、出生した金剛界32尊が次々に光を放って惡趣を照らす、とする。ここは問題がないが、つづいて〔これらの32尊が〕窺波(stūpa)の「階級」となる、とする。この「階級」の概念が不明である。前述の『一切経音義』でも「階級」を取り上げて解説していたが、はつきりしなかった。「窺波の階級になる」とは、各尊が身体をストゥーパに変形してしまうのか、ストゥーパの中に住するのか、或いは仏塔のような福田機能を備えた存在になるのか、判断がつかない。

さらに、窺波の階級になった32尊は、諸佛(五仏)の窺波と法界宮殿を護るとする。諸佛(五仏)の窺波の具体的なイメージがつかめないが、当所までで何らかの形状の金剛界三十七尊曼荼羅の成立が説かれたと思われる。換言すれば、ここまでに《三十七尊出生段》とは異なる、金剛界37尊の出生を觀想する過程が

説かれていると見なすことができる。

最後に、「[これが] 相輪と爲るを成し、[行者の] 身をして金剛界如來毘盧遮那遍照の身を現證せしむる」とあるが、難解である。恐らく直前で成立した何らかの形状の金剛界三十七尊曼荼羅を相輪とすることによって、あるいはそれが相輪となることによって、行者が毘盧遮那仏の身体を証得する、と言っていると思われる。この相輪は恐らく cakra の訳であると推定されるが、cakra とする、或いは cakra となる、が具体的に何を意味しているかは不明である。後期密教の生理的ヨーガにおける人体の cakra を連想することは、行きすぎかと思われる。『分別聖位経』の訳者も恐らく明確に理解できず、当所の cakra を「相輪」と訳し、前出の cakra を「塔の相輪」と訳し分けたとも思われる。『分別聖位経』の「序」においては、この cakra を五解脱輪と解釈することになる。

cakra に関してはすべて推定の域を出ないが、少なくとも当所は《三十七尊出生段》と《三十七尊の加持と得益段》の観想法に対応すると思われる。すなわち、前述のように、《三十七尊の加持と得益段》では、各尊の加持により行者が様々な能力を得ることを示した後、最後の〈当段の功能・目的〉で、金剛界 37 尊の「加持」によって、行者が毘盧遮那の「身」を「頓證」する、とする。一方、《率都婆段》も、何らかの形状の金剛界三十七尊曼荼羅が「相輪」となることによって、行者が毘盧遮那仏の「身」を「現証」する、とする。どちらも、観想の過程は異なっているが、最終的に毘盧遮那仏の身体を獲得する観想法を説いている。

以上のように、《率都婆段》は短く難解ではあるが、《三十七尊出生段》と《三十七尊の加持と得益段》に説かれる 2 種の観想法の機能を合わせ持つ、第三の全く別の観想法を説いていると思われる。

以上のように、挿入文の存在を仮定して、『分別聖位経』本経の基本構造を探ると、『初会金剛頂経』を略説して独自の解釈を提示した《序段》と、3 種の観想法を説く《三十七尊出生段》と《三十七尊の加持と得益段》と《率婆都段》とによる 4 段で構成されている。このなかで、《三十七尊出生段》と《三十七尊の加持と得益段》は、後期密教の生起次第と究竟次第の原初形態を示す互に関連性の高い観想法を

説いている。最後の《率婆都段》は短く難解ではあるが、前の2段の観想法の機能を合わせ持った、全く別の観想法を説いていることが判明する。

挿入された3文は、すべて仏身に関するものであり、『分別聖位經』の「序」と密接に関連している。

#### 註

- 1 『定本弘法大師全集』第3巻73-110頁。T.No.2427, Vol.77, 374-381。
- 2 Vol.18, 291a9。
- 3 『定本弘法大師全集』第1巻41-61頁。
- 4 『定本弘法大師全集』第3巻101頁。T.No.2427, Vol.77, 379c9-10。
- 5 『定本弘法大師全集』第1巻7頁。T.No.2126, Vol.55, 1061a22-23。
- 6 T.No.870『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』(1巻)不空訳, Vol.18, 287c-291c。
- 7 T.No.2176, Vol.55, 1116a19。
- 8 T.No.2120『代宗朝贈司空大辨正廣智三藏和上表制集』(6巻)圓照集, Vol.52, 836-860。
- 9 『表制集』に於ては「三朝所翻經總七十七部凡一百一卷并都目一卷」として、不空は新訳經典を77部挙げるとするが、実際に『大正藏經』に掲載されている經典名は71である。
- 10 T.No.2154『開元釋教錄』(20巻)智昇撰、Vol.55, 477-723。『開元釈經錄』『智昇錄』とも呼ばれる。
- 11 『開元錄』二十巻は開元18年(AD.730)成立であるが、第二十巻「入藏錄下」の最後に「大唐不空三藏新譯衆經論及念誦儀軌法等目錄總一百三巻爲八帙」(Vol.55, 699c16-18)として、不空の新訳經典の目錄が添付されている。この目錄の末尾には「興元元年八月一日於正覺寺新寫入藏便作此目錄已上并目一百四巻用紙總一千二百一十紙」(Vol.55, 700c17-21)とあり、當目錄が興元元年(AD.784)に正覺寺に納められた經典の狀況を記録した現藏目錄として作られたとされる。なお正覺寺については詳細不明であるが、真言宗豊山派宗學研究所の山口史恭常勤研究員から、正覺寺が唐代の益州(成都)の大聖慈寺の中寺に附属していた正覺寺(院)である可能性が高いとご教授頂いた。ここに謝意を表す。當目錄は『大正藏經』

の底本の高麗版のみに付加されており、宋・元・明版には欠いている。また『開元録』の第19と第20巻は、高麗版と宋・元・明三版の異同が多いため、『大正藏經』は第19・20巻について三版のみの校訂テキストを重出している。

- 12 第7帙には「如意輪念誦儀一卷八紙 金剛頂瑜伽護摩儀一卷八紙……大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門一卷十紙 文殊師利菩薩問字母一卷七紙 上十六經十六卷同帙」(Vol.55, 700b12-29)として、16經典が収められていたとする。
- 13 T.No.2156『大唐貞元續開元釋教錄』(3卷)圓照集、Vol.55, 748-770。『統開元積經錄』『貞元統開元積經錄』とも呼ばれる。
- 14 23番目の『襄虞梨童女經』と24番目の『兩寶陀羅尼經』の位置が入れ替わっている。また「觀音觀自在」を「聖觀自在」とするなど僅かな相違がある。なお「三朝所翻經。總七十七部。共一百一卷。并都目一卷」の文も同一である。目録の直後の「爰自幼年承事先師大弘教三藏和尚二十有四載。稟受瑜伽法門……」とする不空の上表文もほぼそのまま掲載している。
- 15 「吉祥天女十二名號經一卷二紙……金剛壽命陀羅尼經一卷經內題云一切如來金剛壽命陀羅尼經二紙右六部經共十卷同第三帙」Vol.55, 767a13-20。
- 16 T.No.2157『貞元新定釋教目録』(30卷)圓照撰、Vol.55, 771-1084。『貞元録』『圓照録』とも呼ばれる。
- 17 (第1卷)總録—奉承御制、(第15卷)總録—總集群經録、(第22卷)別録—有訳有本録—菩薩三藏録—大乘經重単合訳、(第27卷)別録—補闕拾遺録—大乘經重単合訳、(第29卷)別録—現定入藏録—大乘經単訳。
- 18 『貞元録』は訳者ごとに年代順に翻訳經典や事歴等を掲載した總録20巻と、經典を種々の基準で分類した別録20巻とに大きく二分される。
- 19 実際には12經典である。12經典の内、『表制集』不空目録に収録されている經典は8經典である。
- 20 T.No.2128『一切經音義』(100巻)慧琳撰、Vol.54, 311-933。
- 21 T.No.2166『慈覺大師在唐送進録』(1巻)圓仁撰、Vol.55, 1076-1078。
- 22 T.No.2167『入唐新求聖教目録』(1巻)圓仁撰、Vol.55, 1078-1087。
- 23 『表制集』不空目録と『開元録』付録における經典同定に資すると思われる経題を選び、論文末の「不空目録—『開元録』付録 經典同定表」中に付記した。
- 24 T.No.2169『開元寺求得經疏記等目録』(1巻)圓珍撰、Vol.55, 1092。AD.853。『開

元寺目録』とも呼ばれる。

T.No.2170 『福州温州台州求得經律論疏記外書等目録』（1巻）圓珍撰、Vol.55, 1092-1095。AD.854。『隨身録』とも呼ばれる。

- 25 T.No.2171 『青龍寺求法目録』（1巻）圓珍撰、Vol.55, 1095-1097。AD.855。『青竜寺録』とも呼ばれる。

T.No.2172 『日本比丘圓珍入唐求法目録』（1巻）圓珍撰、Vol.55, 1097-1101。AD.854。『円珍入唐求法目録』『円珍入唐目録』とも呼ばれる。

T.No.2173 『智證大師請來目録』（1巻）圓珍撰、Vol.55, 1102-1108。AD.859。『智証大師請來目録』『円珍請來目録』とも呼ばれる。

- 26 『青竜寺録』では「已上茲載貞元拾遺目録中」（T.No.2171.Vol.55, 1096c24）として80典籍を挙げるが、その18番目に『分別聖位經』が掲載されている。この80典籍の内では不空目録所収の經典は『分別聖位經』も含めて45本である。当所は「貞元拾遺目録」から収集したとされるが、不空目録と共通する45經典は、どちらかというとな空目録の掲載順に近い順番で、当所の前部57本目までに集中して掲載されている。『貞元録』第25巻の別録の〈補闕拾遺録〉とは相違する。

- 27 不空目録と共通する45經典中、經題が完全に一致する事例は16例だけである。「菩提場所説一字頂輪王經」の「一字」を省略するような例も、『分別聖位經』を含めて7例ほど確認できる。

- 28 当所の割注において、安然是円覚寺僧正宗叡（809～884）も2系統の經題の『分別聖位經』を請來し、また円珍の請來した『分別聖位經』は「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序」としてあったとするが、確認できなかった。

- 29 『分別聖位經』の經題について、佐藤憲英「『聖位經』における諸問題—不空と空海を中心として—」（『大正大学院研究論集』第四十七号、2023年3月15日）において、日本の写經録も視野に入れて詳細に考察されている。

- 30 堀内寛仁『梵藏漢対照 初会金剛頂經の研究 梵文校訂編』（密教文化学会、1983（上））§1～§33。T.No.865『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』（3巻）不空訳、Vol.18, 207a11-208b8。

- 31 前注の堀内本 §32・33、不空訳『初会金剛頂經』Vol.18, 207a24-208b8。

- 32 漢訳『初会金剛頂經』が「入一切如來平等智三昧耶」（Vol.18, 208a26）とすると、『分別聖位經』は「即入一切如來金剛平等智印三昧耶」として「金剛」と「印」

『分別聖位經』について(1) (木村秀)

- を加えているが、梵文でも「sarvatathāgata-**vajra**-samatā-jñāna-**mudrā**-guhya-samaya-praviṣṭaḥ」(堀内本 §31) とあり、梵文・藏訳ともに金剛と印を加えている。
- 33 厳密に言えば、毘盧遮那仏の智恵は総合智であり、分智ではないと考えられるため、分智は 36 であり、「三十六の内證の」とされるべきであり、当所も金剛界 36 尊とすべきである。毘盧遮那仏の自受用智と働きについては、稿を改めて考察したい。
- 34 「塔」は通常 stūpa の訳であるが、当所の直後に「鞞觀波」が 2 回使われており訳語を変える理由が見つからない。cakra 等の原語を想定しても、不自然さが残る。今のところ「塔の相輪」は cakra の複数形の訳である可能性を想定しているが、確証はない。

不空目録 — 『開元録』付録 經典同定表

『表制集』不空目録	『開元録』付録
02 <u>金剛頂瑜伽般若理趣經</u> 一卷 (八紙) { 經内題云大樂 <u>金剛</u> 不空眞實三摩耶經般若波羅蜜多 <u>理趣品</u> }	58) <u>大樂金剛理趣</u> 一卷 七紙
03 <u>觀自在菩薩授記經</u> 一卷 (十三紙) { 經内題云佛說大方廣曼殊室利經 <u>觀自在菩薩授記品</u> 第三十一 }	16) <u>大方廣曼殊室利經</u> 一卷 十三紙
04 <u>瑜伽念珠經</u> 一卷 (二紙) { 經内題云 <u>金剛頂瑜伽念珠經</u> 於十萬廣頌中略出 }	28) <u>金剛頂瑜伽念珠經</u> 一卷 二紙
05 <u>奇特佛頂經</u> 三卷 (六十八紙) { 經内題云一字 <u>奇特佛頂經</u> 現威德品 }	09) 一字 <u>奇特佛頂經</u> 三卷 六十八紙
06 <u>觀自在菩薩最勝明王心經</u> 一卷 (二十二紙) { 經内題云 <u>金剛恐怖集會方廣儀軌觀自在菩薩三世最勝心明王經</u> 序品第一 }	34) <u>金剛頂恐怖最勝心明王經</u> 一卷 二十一紙
07 <u>金剛頂瑜伽文殊師利菩薩經</u> 一卷 (二紙) { 經内題云法一品亦名 <u>五字呪法</u> }	47) <u>金剛頂經瑜伽五字念誦儀</u> 一卷 <u>十二</u> 紙?
08 <u>阿唎多羅阿嚧力經</u> 一卷 (二十一紙)	12) <u>阿唎多陀羅尼經</u> 一卷 二十一紙

- { 經內題云阿喇多羅陀羅尼阿嚕力品第十四 }
- 09 普賢行願讚一卷 (五紙) 68) 普賢菩薩行願讚 一卷 五紙
- 10 地藏菩薩問法身讚一卷 (五紙) 69) 地藏菩薩請問法身讚 一卷 五紙
- { 經內題云百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚 }
- 11 出生無邊門經一卷 (十紙) 06) 出生無邊門陀羅尼經 一卷 十紙
- { 經內題云出生無邊門陀羅尼經 }
- 12 大吉祥天女經一卷 (七紙) 33) 大吉祥天女一百八名無垢經 一卷 九紙
- { 經內題云佛說大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經 }
- 13 底哩三昧耶經三 (一) 卷 (十四紙) 52) 底哩三昧耶不動使者念誦儀 一卷 十四紙
- { 經內題云底哩三昧耶不動使者念誦品 }
- 14 十一面觀自在菩薩經一 (三) 卷 (二十四紙) 20) 十一面觀世音菩薩經 三卷 二十四紙
- { 經內題云十一面觀自在菩薩心密言儀軌經 }
- 15 吉祥天女十二名號經一卷 (二紙) 32) 吉祥天女經 一卷 一紙
- 16 金剛頂瑜伽十八會指歸一卷 (九紙) 67) 瑜伽指歸 一卷 十紙
- { 經內略無十八會字 }
- 17 金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 54) 略述金剛頂瑜伽修證法門儀 一卷 十三紙
- (并序十三紙)
- { 并序經中云修證法門序 }
- 18 菩提場所說一字頂輪王經五卷 (七十八紙) 08) 菩提場一字頂輪王經 五卷 八十一紙
- 19 寶篋經一卷 (六紙) 26) 一切如來全身寶篋經 一卷 五紙
- { 經內題云一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼經 }
- 21 大孔雀明王經三卷 (五十紙) 05) 大孔雀明王經 三卷 五十紙
- { 經內題云佛母大孔雀明王經初有啓請法在上卷經前 }
- 22 大雲請雨經二卷 (十四紙) 10) 大雲請雨經 二卷 二十五紙
- { 經內題云大雲請雨經 }
- 23 (24) 龔虞梨童女經一卷 (四紙) 31) 龔虞梨童女經 一卷 二紙

{ 經内題加佛說 }

24 (23) 雨寶陀羅尼經一卷 (五紙)

{ 經内題中加佛說兩字 }

25 稻稔喻經一卷 (八紙)

{ 經内題云慈氏菩薩所說大乘緣生稻稔喻經 }

26 大寶廣博樓閣經三卷 (四十五紙)

{ 經内題云大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼 }

27 菩提場莊嚴經一卷 (二十二紙)

{ 經内題云菩提場莊嚴陀羅尼經 }

28 除一切疾病陀羅尼經一卷 (一紙)

29 能淨一切眼陀羅尼經一卷 (二紙)

{ 經内題云能淨一切眼疾病陀羅尼經 }

30 施焰口餓鬼陀羅尼經一卷 (四紙)

{ 經内題云佛說救拔焰口餓鬼陀羅尼經 }

31 三十五佛名經一卷 (二紙)

{ 經内題云佛說三十五佛名禮懺文出烏波離所問經 }

32 八大菩薩曼陀羅經一卷 (三紙)

33 葉衣觀自在菩薩陀羅尼經一卷 (八紙)

{ 經内略無陀羅尼字 }

34 訶利帝母經一卷 (三紙)

{ 經内題云訶利帝母言法 }

35 毘沙門天王經一卷 (四紙)

36 觀自在菩薩說普賢陀羅尼經一卷 (七紙)

37 文殊問字母品經一卷 (題云文殊問字母品第十四三紙) { 三紙 }

30) 雨寶陀羅尼經一卷 四紙

27) 慈氏菩薩稻稔喻經一卷 八紙

04) 大寶陀羅尼經 三卷 四十五紙

07) 菩提場莊嚴陀羅尼經一卷 二十三紙

15) 除一切疾病陀羅尼經一卷 二紙

29) 淨眼陀羅尼經一卷 二紙

13) 救拔焰口餓鬼陀羅尼經一卷 四紙

62) 三十五佛名禮懺文一卷 二紙

21) 八大菩薩曼荼羅經一卷 三紙

24) 葉衣觀自在菩薩經一卷 八紙

66) 訶利帝母眞言法一卷 三紙

14) 毘沙門天王經一卷 五紙

23) 觀自在菩薩說陀羅尼經一卷 五紙

60) 文殊師利菩薩問字母一卷 七紙 ?

- 38 金剛頂蓮華部心念誦法一卷 (三十三紙)  
 { 經內云念誦儀軌 } 『門仁錄』：瑜伽蓮華部念誦法經一卷不空
- 39 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在念誦法一卷 (二十八紙)  
 { 或二卷經內題菩薩修行儀軌 }
- 40 無量壽如來念誦儀軌一卷 (十二紙)  
 { 經內云修觀行供養儀軌 }
- 41 阿閼如來念誦法一卷 (十紙)  
 { 經內云念誦供養法 }
- 42 佛頂尊勝念誦法一卷 (八紙)  
 { 經內云佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌 }
- 44 金剛王菩薩念誦法一卷 (十二紙)  
 { 經內云祕密念誦儀軌 }
- 45 普賢金剛薩埵念誦法一卷 (十二紙)  
 { 經內云瑜伽念誦儀軌 }
- 46 金剛頂瑜伽五祕密修行儀軌一卷 (十二紙)  
 { 經內云金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌 } 『門仁錄』：金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌一卷不空
- 47 金剛壽命念誦法一卷 (三紙)  
 { 經內云陀羅尼念誦法 }
- 49 一字佛頂輪王念誦儀軌一卷 (十二紙)  
 { 經內題中無佛字 }
- 51 如意輪念誦儀一卷 (八紙)  
 { 經內云觀自在如意輪菩薩念誦法 }
- 52 大虛空藏菩薩念誦法一卷 (五紙)
- 53 瑜伽蓮華部念誦法一卷 (七紙)
- 36) 金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一卷  
 二十六紙
- 41) 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀一卷二十七紙
- 38) 無量壽如來觀行儀軌 一卷 十二紙
- 39) 阿閼如來念誦儀 一卷 十紙
- 48) 佛頂尊勝念誦儀 一卷 八紙
- 42) 金剛王菩薩念誦儀 一卷 十二紙
- 43) 普賢金剛薩埵念誦儀 一卷 十二紙
- 40) 金剛頂五祕密修行念誦儀 一卷 十二紙
- 22) 金剛壽命念誦經 一卷 三紙
- 44) 一字頂輪王念誦儀 一卷 十四紙
- 45) 如意輪念誦儀 一卷 八紙
- 57) 大虛空藏菩薩念誦儀 一卷 六紙
- 53) 瑜伽蓮華部念誦儀 一卷 七紙

- 円仁録：觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門一卷不空
- 54 (聖) 觀自在菩薩眞言觀行儀軌一卷(六紙) 51) 觀自在眞言觀行儀 一卷 五紙  
{ 經内云瑜伽觀行儀軌 } 『円仁録』：觀自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌一卷不空
- 55 觀自在多羅瑜伽念誦法一卷(十三紙) 49) 金剛頂經多羅菩薩念誦儀 一卷 十紙  
{ 經内云金剛頂經多羅菩薩念誦法 }
- 56 甘露軍吒利瑜伽念誦法一卷(十八紙) 35) 甘露軍荼利念誦儀軌 一卷 十九紙  
{ 經内題云甘露軍吒利菩薩供養念誦成就儀軌 }
- 57 華嚴入法界品四十二字觀門(門觀)一卷(六紙) 59) 大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門一卷十紙  
{ 經内題云大方廣佛花嚴經 }
- 58 文殊讚法身禮一卷(三紙) 61) 文殊師利讚佛法身禮 一卷 三紙  
{ 經内題云大聖文殊師利菩薩讚佛法身禮并序 }
- 59 受菩提心戒儀一卷(三紙) 63) 最上乘教受戒懺悔文 一卷 二紙  
{ 經内題云最上乘教受戒懺悔文普賢瑜伽阿闍梨集 }
- 60 金剛頂瑜伽三十七尊禮一卷(四紙) 64) 金剛頂道場禮懺文 一卷 四紙  
{ 經内題云金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來身受用身内證智眷屬法身異名佛最上乘三摩地禮懺文 }
- 61 理趣般若釋一卷(般若理趣經釋二卷三十二紙) 70) 大樂金剛理趣釋 一卷 三十二紙  
{ 經内題云大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋 }
- 62 大曼荼羅十七尊釋一卷(三紙) 25) 般若波羅蜜多理趣經 一卷 三紙  
{ 經内題云般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧耶眞實金剛菩薩等一十七大曼荼羅義述 }
- 63 金剛頂瑜伽護摩儀一卷(八紙) 46) 金剛頂瑜伽護摩儀 一卷 八紙  
{ 經内云儀軌 }

64 <u>諸(都)部陀羅尼目</u> 一卷(四紙) 〔經內題云 <u>陀羅尼門諸部要目</u> 〕	71) <u>陀羅尼門目</u> 一卷五紙
65 大乘緣生論一卷(十紙) 〔論內題云聖者鬱楞起造〕	74) 大乘緣生論一卷十紙
66 <u>七俱胝佛母陀羅尼經</u> 一卷(十九紙) 〔經內題云 <u>七俱胝佛母</u> 所說准提陀羅尼經〕	11) <u>七俱知佛母經</u> 一卷十九紙
67 <u>大虛空藏菩薩所問經</u> 八卷(一百七紙)	01) 虛空藏經八卷一百一十五紙
68 <u>仁王經</u> 二卷(并序御製三十五紙) 〔經內題云 <u>仁王護國般若波羅蜜多經</u> 并御製序〕	02) <u>仁王般若經</u> 二卷三十四紙
69 <u>密嚴經</u> 三卷(并序御製五十一紙) 〔經內題云 <u>大乘密嚴經</u> 并御製序〕	03) <u>大乘密嚴經</u> 三卷五十四紙
70 <u>仁王念誦儀軌</u> 一卷(十九紙) 〔經內題云 <u>仁王護國般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌</u> 〕	37) <u>新譯仁王般若念誦軌儀</u> 一卷二十紙
<b>同定不能經典</b>	
<b>『表制集』不空目錄</b>	
01 金剛頂瑜伽真實大教王經三卷(四十三紙)〔經內題云金剛頂一切如來真實攝大乘現證大乘王經〕	
20 金剛壽命陀羅尼經一卷(二紙)〔經內題云一切如來金剛壽命陀羅尼經〕 『門仁錄』：佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經一卷 <u>金剛智譯</u>	
43 金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法一卷(十三紙)	
48 一字頂輪王瑜伽經一卷(六紙)〔經內云瑜伽翳迦訖沙羅烏瑟尼沙所訖囉眞言安怛陀那儀則一字頂輪王瑜伽經〕	
50 仁王般若念誦法一卷(十五紙)	『門仁錄』：仁王般若念誦法經一卷不空
71 仁王經疏三卷	
<b>『開元錄』付錄</b>	
17) 大聖文殊佛利經三卷五十二紙	『門仁錄』：大聖文殊師利菩薩佛利功德莊嚴經三卷不空

『分別聖位經』について(I) (木村秀)

19) 大隨求陀羅尼經 二卷 三十紙	『円仁録』：普遍光明大隨求陀羅尼經二卷
50) 金剛頂勝初瑜伽略出念誦儀一卷 十紙？	『円仁録』：金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌一卷 <small>不空</small>
55) 金剛頂降三世大儀 一卷 四紙 『貞元録』には掲載	『円仁録』：金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心眞言一切如來蓮華大曼荼羅品一卷 <small>不空</small>
56) 大孔雀明王壇儀 一卷 五紙	『円仁録』：佛說大孔雀明王畫像壇儀軌一卷 <small>不空</small>
65) 囊裏梨成就法 一卷 一紙	『円仁録』：？
72) 王法政理論 一卷 九紙	『円仁録』：佛爲優填王說王法政論經一卷 <small>不空</small>
73) 大乘起信論 二卷 二十七紙	『円仁録』：欠

經典名の頭に附した番号は『開元録』不空目録に掲載される順番、1)等のカッコ付きの番号は『開元録』付録に掲載される順番。

( )内は『続開元録』上巻の情報、{ }内は『同』下巻の内題等の情報。